2版

様　式　C－19、F－19－1、Z－19　(共通)

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　4 年　6 月 10 日現在

機関番号：３４５３３

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：１８Ｋ１０６２９

研究課題名（和文）認知症の人の生活状況を評価する安心尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

研究課題名（英文）Development of a scale to measure comfort in the daily lives of people with dementia and its reliability and validity

研究代表者

鈴木　千枝（Suzuki, Yukie）

兵庫医療大学・看護学部・准教授

研究者番号：１０６３５８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，認知症の人の生活における安心を評価する尺度を開発することである．まず，安心の概念分析を行い，それを基に安心尺度原案を作成した．次に，専門職に対するインタビューおよび予備調査の実施により，21項目から構成される安心尺度を開発した．本調査では，軽度認知症の当事者を対象に自記式質問紙調査を実施し，得られた回答は，既存のQOL尺度等とともに主成分分析を実施した．その結果，安心尺度はQOL尺度の測定内容と類似性を示しつつ，「心地よい生活」「生理的欲求の充足」等その独自性が認められ，軽度認知症の人の生活における安心を測定するツールとして有用な客観的指標であることが明らかになった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
認知症の人が，地域で安心して暮らし続けるための支援体制の構築は喫緊の課題である．生活とは，その人の心身の状況や文化，価値観などに影響を受ける極めて個別性の高いものである．軽度認知症の人を対象に開発された本尺度を活用することで，当事者にとっての安心，一人ひとり異なる生活上の安心を客観的に測定することが可能となり，認知症になっても地域で安心して生活できるための支援方略を見出すことに寄与できると考える．

研究成果の概要（英文）：The study aimed to develop a scale to measure comfort in the daily lives of people with dementia. First, we conducted a conceptual analysis of comfort in the daily lives to collect comfort-related factors. Based on these factors, we drafted the comfort scale. Next, we developed the comfort scale consisting of 21 items by conducting interviews with professionals and a preliminary survey. In this study, we conducted a self-administered questionnaire survey to evaluate the daily living comfort of people with mild dementia using the scale. The responses were analyzed along with the existing QOL scale, through principal component analysis. Then, measurement dimensions were examined. The results revealed that the comfort scale shows similarities to the measurement contents of the QOL scale and its uniqueness such as “comfortable living”. The scale is an objective indicator and a useful tool for measuring the daily living comfort of people with mild dementia.

研究分野：在宅看護学

キーワード：認知症　生活　安心　尺度　開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国は，高齢者人口の増加とともに認知症高齢者の一層の増加が見込まれ，厚生労働省は，2025 年を目途に，地域の包括的な支援・サービス提供体制の構築を推進している．目指すのは，認知症になっても，住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる社会システムの構築である．しかし，自宅で生活している認知症の人の現状は，意思疎通が困難なことによる人間関係の悪化，行動・心理症状が生活に及ぼす影響，家族介護力の低下，虐待など困難なことが多い．このような状況にある認知症の人が安心して生活できるようになるには，現在の生活状況が認知症の人にとって安心できるものであるか否かを評価し，支援の手がかりとする必要がある．

過去に開発された認知症に関する尺度について，欧米では 1990 年代から認知症高齢者の QOL 評価に関する研究が進められ，活動を楽しんでいるかどうかという点から QOL を評価する Pleasant Events Schedule-Alzheimer’s Disease (PES-AD) (Teri et al.,1991)や，認知症に特異的な健康関連 QOL を評価する Alzheimer’s Disease Related Quality of Life (ADQOL) (Rabins & Kasper, 1997）などが開発されている．わが国においては，認知症高齢者の生活者としての健全さを測定する生活健康スケール（中島ら，1992）や，抑うつを測定する Dementia Happy Check-Home Care Version（森本ら，2002）などがある．その他，認知症高齢者の心の状態を測定する「おだやかスケール」（辻村，2010）が開発されているが，いずれも認知症の人の生活状況を評価するものではない．

以上のことから，認知症の人の生活状況を評価する「安心尺度」を開発し，実践の場で活用することで支援の提供がスムーズに行え，認知症の人が安心して暮らせる環境を速やかに整えることができると考える．

２．研究の目的

本研究の目的は，認知症の人の生活状況を評価する「安心尺度」を開発し，その信頼性・妥当性を検討することである．本研究では，認知症の人を地域の中で生活している社会の一構成員としてとらえ，家族やケア提供者などの人的環境，物的環境を含めた生活の場における安心を評価する尺度の開発を試みる．その意義として，この尺度を活用することで，認知症の人が住み慣れた地域で安心した生活を送ることが可能になる支援方略を見出すことに寄与できると考える．

３．研究の方法

【第 1 段階】安心尺度原案の作成

概念分析により認知症の人の生活における安心の定義づけを行い，質問項目を抽出する．これらの項目について，老人看護専門看護師，訪問看護認定看護師，認知症ケア専門士でもある研究者等の専門家にグループインタビューを実施し，内容妥当性を検討し，安心尺度原案を作成する．

【第 2 段階】安心尺度の開発

地域で生活している軽度認知障害(MCI)および軽度認知症の人 10 名を対象にプレテストを実施，表面妥当性を検討し，安心尺度を完成させる．

【第 3 段階】安心尺度の有用性の検討

MCI および軽度認知症の当事者 400 名を対象に自記式質問紙調査を実施し，得られた回答は，認知症者を対象として開発された QOL 尺度の全 24 項目および，おだやかスケールを参考に作成した 8 項目とともに主成分分析を行い，安心尺度の測定次元を検討する．

４．研究成果

1)　安心の概念分析

国内外の文献から，認知症の人の生活における安心の概念分析を実施した結果，6 つの属性【欲求充足の保障】【他者による「私の理解」】【精神的混乱の回避】【心の安定を示す表情の出現】【なじみの環境に身を置く】【平穏な暮らし】が明らかになり，39 の質問項目が抽出された．また，認知症の人にとっての生活における安心を，「他者による認知症の人の理解があり，欲求の充足が保障され，心の乱れがなく，なごみ，平穏な暮らしが営めること」と定義した．

概念分析の成果は，国際学会 Aging & Society: 8th Interdisciplinary Conference で発表し，日本在宅ケア学会誌に投稿した．

2)　安心尺度の開発

概念分析から抽出した質問項目について，在宅看護，認知症看護の有識者から，軽度認知症の人が理解，回答しやすい表現であるか，生活状況における安心を過不足なく示しているか助言を得ることで内容妥当性を確認し，最終的に 21 項目の安心尺度原案を作成した．また，地域で生活している軽度認知症の人 10 名を対象にプレテストを実施，表面妥当性の検討を行い，質問項目の表現を修正し安心尺度を完成させた．

3)　安心尺度の有用性の検討

2021 年 5 月～10 月に本調査を実施した．本研究では、これまで把握することが困難であった認知症の人がとらえる安心を測定する客観的指標の開発を試みるため，MCI および軽度認知症の当事者 234 名を対象に自記式質問紙調査を実施した．得られた回答は，認知症者を対象として開発された QOL 尺度の全項目および，おだやかスケールを参考に作成した 8 項目とともに主成分分析を行い，安心尺度の測定次元を検討した．その結果，第 1 主成分「心地よい生活」は，安心 11 要素のみで構成され，他のすべての項目は負荷量を示していないことから，安心尺度独自のコアとなる主成分であると判断できた．また，第 4 主成分「生理的欲求の充足」は同様にその独自性が示された．これら 2 つの主成分は，既存の QOL 尺度の測定内容と類似性を示しつつ，独自性のある主成分であることがうかがえた．また，本研究における日々の生活の営みを示す日常生活行動および安心は概念分析により定義づけられており，その内容妥当性が認められたと考える．これらのことより，本研究で開発した安心尺度は，QOL 尺度ではとらえることが困難な側面を含む軽度認知症の人の生活における安心を測定するツールとして有用な客観的指標であることが明らかになった．

本研究の成果は，2022 年 7 月に日本在宅ケア学会学術集会で発表予定である．また，現在は学術誌への投稿に向けて論文執筆中である．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木　千枝，谷垣　静子	４．巻 23(2)
２．論文標題 認知症の人にとっての生活における安心の概念分析	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本在宅ケア学会誌	６．最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Yukie Suzuki, Shizuko Tanigaki
２．発表標題 The Concept Analysis of “Comfort in the daily life of people with dementia”
３．学会等名 Aging & Society: Eighth Interdisciplinary Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木千枝，谷垣静子，岩田昇
２．発表標題 軽度認知症の人の生活状況における安心尺度の開発
３．学会等名 第27回日本在宅ケア学会学術集会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関